

特集：別科（1934～1944）

「別科における海外帰国子女、二世教育の特徴」

服部 恵子

はじめに

「ミス・ハミルトンの校長時代、わが英和には他校に見られない一つの組織が生まれた。それはスペシャルクラス (S.C.) 即ち別科である。」

『東洋英和女学院七十年誌』は「別科」についてこのように述べている。当時、スペシャルクラスとも呼ばれたこの別科は、「海外に永く滞在した外交官、商社等の社員の子のためには帰国した場合特別指導をするクラス」であり、それは太平洋戦争が本格化する昭和18年頃まで続いたが、そのころには「海外の二世たちまで留学するように盛んになり、時には三十数名に及んだこともある」。

この別科は、「他校にみられない」と述べられている通り当時としては極めて先駆的な試みであった。一つに、今でいう海外子女教育を率先したことである。そしてもう一つに、日系二世の「日本留学」、即ち太平洋戦争を背景として増加した二世教育の先駆けとなったことである。(注 i)

筆者は、カナダのブリティッシュコロンビア州に渡った日本人移民と、その教育活動に携わった女性宣教師（その多くが日本での任期を終えて帰国した東洋英和の元教員）を研究対象としている。そのような立場から別科を見た時、それは単なる海外子女教育を超えた歴史的重要性をもつ教育実践として映る。さらには、東洋英和の独自性とカナダ人女性宣教師の宣教方針をも浮き上がらせるものでもあると言える。

そこで本文では、別科の特徴を概観した後、次の二点を中心に別科のもつ意義を考えたい。

一つは、二世教育の場としての別科の役割である。別科は当時北米の日系二世の留学先として人気を博した恵泉女学園留学生特別科や早稲田国際学院の先駆けとなりながらも、二世教育ではなくむしろ女学校への編入のための適応教

育という性格を濃くしていった。それはなぜなのか。

二つ目は、別科における宣教師の不干渉である。ミス・ハミルトンは初め「バイリンガルで教育できるのは秋山はる先生しかいない」という理由で秋山を主任につけたが、実際に行われていたのはバイリンガル教育というより日本語指導が中心であった。それは、秋山がミス・ハミルトンの意図を無視したわけでも、ミス・ハミルトンが別科に対して無関心だったわけでもない。宣教師の不干渉は、逆にその宣教理念を色濃く映し出している。

「別科」とは何か

(1) 別科生と教育内容

別科が誕生した背景には、海外赴任から帰国した親が日本語の習得が不十分な子どもたちのための特別な教育環境を必要としていたことがある。親たちの要望は当時、富裕層の子女に人気が高かった東洋英和に届き、校長であったミス・ハミルトンが別科の設置を決定した。それが1934年の春のことである。

別科は7歳～17歳までの子女を対象に随時受け入れをしていた。推薦者が必要とされたが、その学力は問われなかった。例えば1941年に高等女学科を卒業した原田知津子も推薦を得て別



秋山はる先生と別科生（別館らせん階段にて）

科に入学した一人である。女史は「〈思い出の先生がた〉8 カートメル先生の思い出」の中で、1934年トロント在住時にミス・プレストンのバイブルクラスに出席し、さらにそこでミス・カートメルと出会い別科の存在を知ったと語っている。そしてさっそくミス・カートメルから推薦を得て、設置間もない別科へと入学した。(本号p.7-p.8参照)

1934年から閉鎖される1943年度まで、別科に在籍した生徒数は、下の表1の通りである。

では実際にどのような国から生徒は集まっていたのか。1939年3月当時の別科生の出身地は表2の通りである。

別科は小学科に設置され、別科生は礼拝や遠足、修学旅行等も小学生として参加した。最も力をいれて教育されたのは国語、習字であった。生徒間の学力差も大きかったため、国語では理解力別にAクラスとBクラスが作られ、さらにそれをグループ分けし、理解力の高いものが他を助けるという形態をとるようになった。唯一英語で行われるのは聖書の時間で、これは宣教師によって担当された。別科生同士の会話は英

表1 「別科 4月時点の在籍者数」

年度	人数
1934(昭和9)	4月：15人、5月20人
1935(昭和10)	26人
1936(昭和11)	27人
1937(昭和12)	20人
1938(昭和13)	22人
1939(昭和14)	29人
1940(昭和15)	26人
1941(昭和16)	31人
1942(昭和17)	23人
1943(昭和18)	16人

(原p.140から筆者作成。出典は『理事会記録』『教員会議録』『教務日誌』となっている)

語で行われることが多かったようであるが、教育内容は日本語を徹底的に習得させるものとなっていた(表3参照)。

(2) 秋山はる主任と岡本幸江

別科は、多種多様な出身地と文化的背景を持った7歳から17歳までの生徒の集まりであった。それが30人前後、同じクラスで同じカリキュラムに則って学ぶのであるからまとめる教員の苦労たるや想像に難くない。その大変な仕事を任されたのが、主任の秋山はるであり、そして後に秋山と共に別科を教える岡本幸江であった(文中 敬称略)。

別科の設置と同時に主任に任命された秋山は、東洋英和の高等科英語科を1916年に卒業し、当時小学科教師を15年務めていたベテラン教師であった。別科について考える時、ミス・ハミルトンから強い信任を得ていた女史の存在を抜きにして語ることはできない。

最初、秋山は別科を受け持つことをしきりに嫌がったそうである。しかしミス・ハミルトンに頭を下げられて頼まれたこともあり、渋々ながら主任を引き受けた。『史料室だより』No.14のために受けたインタビューの中で、女史は別科を担うことに対して困惑を覚えた理由を、教

表2 「別科生の出身地 (1939年)」

出身地	人数
アメリカ本土	11名
ハワイ	8名
イギリス	4名
アフリカ、オーストリア、ドイツ	各2名
カナダ、インド、オーストラリア、マレー半島	各1名
計	33名

(『小羊』第5号、1939年3月より筆者作成)

表3 「別科 教科内容」

科目	内容
国語、習字	1日2時間、週に11時間学ぶ。A、Bクラスがあり、Aクラスは女学科の国語教師が担当し、女学科1、2年程度の内容を学ぶ。Bクラスは秋山が担当し、小学校の国定教科書12巻を学ぶ。教科書の程度に応じてわけ、複式の形態で授業を行い、教科書1冊が終わる毎にテストを行う。
お話の時間	日本語か英語の本を読み、その内容を日本語で話す。
ライブラリーの時間	英和全クラスで行われていた授業。本科生は図書室で本を読むが、別科生は日本語を読むように指導される。
聖書の時間	宣教師が担当し、英語で行われる。
普通科目	算数、体育、社会、図工に相当する。樫村辨市小学科長他が担当。
課外授業	小学科と共に修学旅行に行き、さらに週に一回校外見学をする。

(原論文、『史料室だより』No.14参照、筆者作成)



左：秋山はる先生、右：君塚茂先生（1920年頃）

育のノウハウが全くなかったこともさることながら、「外国帰りの子供は無作法で、乱暴で、手に負えない所がある」という当時の日本人の多くが持っていたある種の偏見があったためだと述べた。しかし、別科生たちと接する中でその先入観は徐々に変化し、生徒らの率直に意見を言う態度に好感をもつようになったのである。

「私はね、別科を教えて、初めは嫌だ嫌だなんて言って、ミス・ハミルトンに怒りましたがね、やってみてよかったと思いました。あたしのね、気持ちにぴったり、性質に…。嘘、偽りが無いの（中略）あなたはね、今、あたしの方を向いて話をよーく聞いているような顔してるけど、ほかのこと考えてますね、ってあたしが言うとな、日本の子なら『そんなことはありません』ってきつというかも知れない。『いえ先生、そうじゃありません』ていうかも知れない。ところが向こうの子どもは『はい、ほかのこと考えてます』ちゃんと言う。それがすごくあたしには気に入ってるんです。だからね、扱いいいんです。暴れん坊のところありますけどね。すごく楽しんでやりました。」

（『史料室だより』No.14。以後、インタビューの抜粋は特別な記述がない限り「秋山談」、濃い青字は引用とする）。

戦後1950年より1979年まで中高部国語科教諭として奉職した岡本幸江（1936年高女科卒）もまた、別科に携わった教員の一人である。1940年、女子大を卒業した岡本は出身校の東洋英和に戻り、別科の講師として採用された。そして別科が閉鎖される1943年度まで、週三回ほど国語のAクラスを教えながら秋山の補佐的役割を果たした。

年齢も出身も学力もバラバラのクラスは秋山と岡本らの熱心な指導によって一つにまとまり、強い連帯感を持つようになった。それは秋山の言葉だけでなく、元別科生の声にも表れている。

「（女学科への編入が決まっても）別科が好きで

女学科へ行きたくないという生徒もいて困りました。（中略）別科に帰りたいたいと言う子も大分いましたね。」

「別科の中では、お互いに肩をよせあって、外からのプレッシャーに耐え、過ごしていたという感じですよ。別科の中はいい雰囲気なんです。」（「元別科生談」原p.148）

（3）教育の目的

ここでは、二つの「教育の目的」を見ていきたい。それは、教育をする側の目的とそれを受け取る側の目的である。

まず学校側の目的であるが、その根幹となるのはもちろん東洋英和が掲げていた教育理念である。では具体的にどのような方向性をもって別科生を教育していたのかを知るには、教育内容に対して実質的な決定権を持っていた秋山の当時の発言を見る必要がある。

「家庭の影響の大きい事は言語の上だけではない。精神的方面においてはさらに強い。彼等が外国にあった時、両親から祖国日本の国体を教えられ、偉大な日本精神を吹き込まれた者であると、事々に日本のよい方面を見、誠に純な美しい気持ちをもって（原文ママ）国を愛し、皇国日本の女性と生まれた事に此の上ない感謝をもつ。

反対に家庭の者がこの方面に無頓着であったりすると、汚い物ばかり見る様だ。美しいものは眼にも耳にも入らぬらしい。ドアや路上のタンが気になり、蚊や蠅が多いと不平をもらし日本の男子が不親切だと怒る。事々に、アメリカでは…英国では…と比較し、日本を嫌い日本人を嫌う。偉大な国日本に生を受けながら此れ以上の不幸があろうか。

二世教育（注ii）に当たるものの一大使命は彼らに正しい日本の姿を見せ、国を愛する心を持たせる事であろう。」（小学科『小羊』第5号、1939年3月、p.34）

これを通して分かるのは、別科の教育目的は「日本人」として日本文化に適応すること、日本を愛する気持ちを育むことが最優先にされていたことである。ここで忘れてはならないのは、別科が設置されていたのは1930年代の日本であったことである。生徒一人ひとりの個性とその文化を尊重する、というような教育的理想をもつ現代とは社会状況がかけ離れているのである。異文化を習得した者がしばしば備える日本に対する批判的視点は表立って尊重されず、「皇国日本」の血を受け継ぐものとして修正されるべき点であるとみなされるのは、至極あたりまえのことだったといえる。

元別科生は言う。

「『アメリカ人みたいだ。日本人じゃない。』等といわれると、皆涙を流して悔しがった。学力回復以上に苦勞したのは、日本式の考え方、生活様式、態度、感覚になれない事でした。」(原p.148)

秋山は別科生の気質を「気持ちがいい」と楽しんだが、多くの場合は「日本人らしくない」という非難の言葉で表されてしまったのだろう。このような状況におかれた生徒たちを前に、秋山は日本へ適応させ女学科へ編入させることで彼女たちの将来を切り拓こうと考えていた。その教育目的は、後にのべる二世教育と比較すると大きく方向性が異なるものであった。



「小羊」第三号（1936年）

次に、別科に入学する生徒たちは、どのような目的をもっていったのか見てみたい。1938年の「教員会議録」を見ると、次のような記述がある。

「別科の生徒には二つの種類がある。すなわち女学科に入学を希望する者と、日本的教養をもって再び米国に帰らんとするものである。」即ち、①女学科への編入希望組と、②日本的教養をもって帰国する二世組に分かれていたことになる。

①女学科への編入希望組

これは、主に日本へ帰国した海外子女たちと、長期の留学を考えている二世らが含まれる。女学科へ編入させる場合には、校長、別科主任、樫村辨市小学科長らが協議して決定した。秋山によると、判断材料は「知能、健康、それからその子の努力、年齢の四つの点」であり、「1年位で行くのはよくできる子で、年もあんまり困らない子。だけど大抵2年、多い時には3年くらい」別科で学んでいたという。さらに、編入希望組の中には、次のような生徒もいた。

「三井っていう財閥があるでしょう、その三井さんの娘さんがきたことがある。あれはまだ小学校の課程をしていたの。その親がね、近所にある自分の大きなお屋敷をつかって帰国子女の学校をつくらなくてね、作っちゃったの。」(岡本談)

これが後の啓明学園である。1940年、別科に1年ほどその子女を学ばせた三井高維氏は、私邸を開放して啓明学園小学校を創立した。翌年には中学部と高等学部が創設され、小学部で教育を受けた子女が中・高等部へと編入する仕組みができたが、それはまさに別科をモデルに誕生した学校だったのである。

②日本的教養を備えて帰国する二世

元別科生の一人は、当時の二世の思い出を次のように語っている。

「ハワイやロスの日系人上流社会の二世で、日本語を身につける為の留学生が別科にはいらして、もう大人のレディが同級生でした。帰国生はフランクすぎて、自己主張が強いし、滞在していた夫々の国を、自分の気持ちで自慢するの。そんな事で喧嘩すると、二世のお姉さん達が仲裁してください。英語でしゃべって、ネーと日本語がつくの。」(原p.147)

また、岡本は印象深かった生徒として次のような話をしている。

「一人ね、22才の人がいてね。その人はハワイの人なの。ハワイの二世か三世かわからないけど、女学校に編入するためにいるんじゃないかと、とにかく日本の教養を学んで帰りたいということでね、その人は女学校5年の教科書までやりました。」(岡本談)

当時、日系アメリカ人の間では、子どもたちを祖国の学校に留学させることが一種のステータスとなっており、実際に中上流階級の家庭は競って子どもを日本に滞在させた。中でも娘たちは日本の女学校を出たという証書を求めている。

「アメリカから日本へよこしたりすると、日本の免状が欲しいんですよね。或いはそれは結婚の条件になるかもしれない。」

秋山の指摘はまさに当時の日系人社会の傾向を捉えている。一部の二世、特に男性は政治的な動機や祖国に対する知的好奇心から日本留学を選ぶこともあったが、多くの二世女性にとっ

て日本留学は「日本の教養を身に付けた従順で可憐な大和撫子」という箔をつけることになった。二世女性の結婚相手は必ずしも同世代の二世に限らず、年の離れた一世であったり、移住したばかりの移民であったりしたからである。同じアメリカ生まれの二世と結婚する場合も、その親である一世が少しでも自分たちと同じ日本文化を習得した嫁を求めているのも事実である。

そんな二世女性たちの受け入れ先としても別科は機能していたのであるが、教育内容をみたとき、それは日本の教養を身に付けさせるというよりも、女学科への編入を最終目的においたものであることが分かる。つまり、別科は二種類の目的をもった生徒を受け入れながらも、女学科への編入を前提においた「日本人」の教育に重点がおかれていたと言わざるを得ない。それは秋山の言葉からもわかる。

「よくできる生徒で女学校へ行きたくないって言うよりも、行かないで、それでまた外国へ帰りたいって言うのもなんかあって。で、別科を卒業したのは2、3人です」

つまり、別科に入った生徒のほぼ全員が女学科へ編入したのである。そして短期留学の二世や厳しい編入条件に苦戦した者たちは、英和の別科の後に設置された恵泉女学園へと流れていくことになった。

考 察

(1) 二世教育が発展しなかった理由 —恵泉女学園との比較から—

恵泉女学園は河井道子によって1929年に開校された。彼女はYWCA時代から日本人移民女性の教育に深く関わっており、1935年には日系二世女性を受け入れる母体として恵泉女学園留学生特別科を設置したのである。秋山の記憶によれば、恵泉の教員が別科に参観に来た後、それを参考に留学生特別科を設置したようである。そしてその時教員は次のような提案を女史にしたという。

「(恵泉の教師が参観に来た際) 英和でもって出来の悪いような、まあ出来の悪いのを下さいとはおっしゃらないけれど、困るような事があったら、あたくしの方へ生徒を廻して下さい。」

そしてその通り「(英和の女学科には) ととても無理だなと思うような生徒」は恵泉女学園を紹介され移っていったという。

恵泉の教育目的は女学科への編入にあったのではない。東論文によればそれは「二国間の狭間でトランスナショナルな生き方を余儀なくされた在米生活者の二重性を理解し、二世女性をもつアメリカ市民としての資質と日系民族性を昇華させることであった。」(東p.245) つまり、恵泉が目指したのは「日本人」の育成ではなく、「日系アメリカ人」の育成であり、カリキュラムの中心は基本的な女性作法であった。そして日本語は「国語」ではなくあくまでも「外国語」として教える姿勢が貫かれた。

太平洋戦争を目の前に控えた1930年代、東洋英和と恵泉は日本とアメリカそれぞれが抱えていた特有の教育課題を背負っていた。そのため、「日本人」として女学科への編入を含む適応教育を目標とする別科と、「日系アメリカ人」として日本文化習得を目指す留学生特別科という異なる立場をもつ二つの教育機関が東京に生まれたのである。

恵泉の特別科は別科と同じく太平洋戦争の開幕と共に閉鎖されたが、その同窓誌が出版されアメリカでも同窓会が開かれるなど活発な活動が現在でも維持されている。それは、恵泉での学びそれ自体が独自の完結した教育体系をもっていたからだろう。その比較から言えば、別科はあくまでも女学科編入への補助的なクラスとして認識されていたことがわかる。つまり、別科は東洋英和が設定した大きな教育目標を達成させるための一機関であった。言い換えれば、東洋英和はあらゆる教育的ニーズに応えながらも、多様性を一つの教育理念でもってまとめながら、創立以来の伝統を守ってきたのである。



秋山先生(手前)と別科生(別館屋上にて)

(2) 宣教師の不干渉とその意味

原論文は『別科』の教育実践で特に注目されるのは、担任教師の優れた指導力と弾力的なカリキュラムの設定運営、編入の決定等すべて任されている事である」とのべる。そしてそれは現在の海外子女教育においても重要な示唆をもち、「教師が自由に、その能力を發揮できる、教育環境が大切だ」と原は続けている(原p.155)。別科に関して、宣教師らは現場で教育を行う秋山主任に総てを託し、その考えを最優先させていた。つまり校長はあくまでも調整役にとどまり、あらゆる決定は秋山ら日本人の教員が行っていたようである。

この方針は母国における日系カナダ人に対する教育活動にも見受けられる。宣教師らは経済的支援を行い、日系人間の調整役を務め、カナダ社会への対外的な活動を担うことはあっても、現場の判断には介入しないのである。彼女たちは「日本人の主体性に任せる」という立場を貫いており、簡単にいえば「金を出すが口は出さない」のだ。ただしその立場は、1925年に女性宣教団体の母体が「メソジスト教会」から「カナダ合同教会」に移ってから広まっていることを付け加えておく。宣教団体の理念そのものに大きな変化は見られないが、教会の「異教徒」に対する理解そのものが1925年以降時代の背景を伴って変化したことが重要な理由としてあげられるだろう。

海外伝道の目的の一つに言語と宗教を含む西洋文化の伝播があり、その要としてミッション・スクールは設立されている。それを考えた時、別科に入学する生徒はすでに西洋文化を習得した理想体である。それを別科では「日本人」として再教育するのであるから、本来ならばアベコベのことをしていることになる。しかし、宣教師らはそれに対して支援をするが何も言わない。それは、「口を出さない」という方針に合わせて、彼女たちが東洋英和を「日本人による日本人のための学校」として理解していたことを表すと解釈するのは飛躍し過ぎだろうか。キリスト教理解も、西洋文化の習得も、押しつけではなく日本人自らが選択し行動し後世に受け継いでいくこと。すなわち最終的には宣教師不在で成り立つミッション・スクールこそが彼女たちが目指すものであった、と別科の姿を通して私は再認識するのである。

おわりに

本文は、カナダ人女性宣教師と移民教育を研究する者の視点から別科を再解釈する試みです。史料室のこれまでの調査とその発行物、および先行する研究に多くを依拠しているものの、異なる視点から見ると東洋英和女学院史として少しでも歴史の片鱗に光を当てることに繋がったとしたら、これ以上の幸いはありません。

最後に、私は『カナダ婦人宣教師物語』の英訳の補助者として初めて史料室に関わらせていただきました。それがこの度、「別科」について文章を書く機会を得たことに深く感謝いたします。また、岡本幸江様には、東洋英和の関係者でない私を快く自宅に招き貴重なお話を聞かせていただきました。心より御礼申し上げます。文章、内容共に稚拙な点が多く、今後多方面からご指導を賜ればと願っております。

先行研究、参考資料、文献

- * 原和子『『海外・帰国児童生徒教育』の一考察—第二次世界大戦下の(帰国子女学級) 東洋英和女学院『別科』の事例—(国際基督教大学学報 I - A『教育研究32』、1990) (本号p.9〈資料紹介〉21参照)
- * 東栄一郎「二世の日本留学の光と影—日系アメリカ人の越境教育の理念と矛盾—」吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』(日本図書センター、2005)
- * 「教員会議録」(1938年3月18日)
- * 『同窓会会報 母校創立五十年記念号』(1935)
- * 小学科 小羊会『小羊』第5号(1939年3月)、同第6号(1940年3月)
- * 『東洋英和女学院七十年誌』(1954)
- * 『東洋英和女学院学内ニュース』No.7「別科の存在」(1965)
- * 『史料室だより』No.14「秋山はる先生のお話:別科海外帰国子女の教育」(1981)
- * 同 No.63「〈思い出の先生がた〉8 カートメル先生の思い出」(2004)



岡本幸江先生と服部恵子さん
(2010年10月岡本先生ご自宅にて)

注 i 日米間の緊張が高まっていた1930年代、アメリカの日系人たちを中心に「太平洋の架け橋論」が白熱していた。日系人らは、日米の外交問題は相互の国民の誤解に生じていると考え、アメリカ国籍をもつ二世を祖国に留学させ、その言語と文化を習得することによって二国間の「架け橋」となることを期待していた。それが「太平洋の架け橋論」であり、その理想のもと多くの二世たちが日本、特に恵泉女学園留学生特別科と早稲田国際学院に留学した。

注 ii ここでいう「二世教育」とは、移民の子どもである「二世」と海外赴任から帰国した家族の子どもである「海外子女」の二種類を同時に含んでいると考えられる。(大阪女学院 常勤講師)

【史料室より】

服部恵子さんは2年前まで同志社大学大学院で、WMS(カナダ婦人ミッション)の本国における伝道活動、中でもその日系二世教育について研究してこられた方です。調査の中で、WMSの活動が日本は言うに及ばずカナダでも実態や意義が明らかになっておらず、また評価もされていないことを残念に思っておられたそうです。そのため、『カナダ婦人宣教師物語』の趣旨に共鳴し、英訳版作成に大変協力して下さいました。また、史料室に来室されたときは、特に英文で書かれた史料について、研究者の目でも多くの助言をして下さいました。今号では別科に興味を持たれた服部さんに特にお願いして寄稿していただきました。



〈参考資料① 別科生徒の作文〉私の見た日本

別科 平井 知津子

「知津子、もう日本に着いたのよ。早くお起きなさい。」とお母さんの聲、私は飛び起きて、船の窓から外を見ると、向ふの方に美しい櫻の國日本が見えた。之はもう二年前の話ですが、其の時に感じた事を少し話ませう。

横濱から自動車で東京へどんと走って行く途中、私は窓から目を丸くして方々を見ました。「まあ、何と荷車や自轉車の多いことせう。何といふ小さい色の黒い人が澤山ゐるのでせう。」と不思議で不思議で仕方ありませんでした。(中略)

初め、電車に乗った時私は非常にびっくりしました。男の人達は皆平氣で坐つてゐて、女の人とは殆ど立つてゐるのを見ると、何と日本の男は不作法なのでせうと思ひました。外國では電車でも汽車でも女子が立つてゐて、男が坐つてゐるのは見る事が出来ません。若し女を立たせ

てゐる男があれば、それは非常にお行儀の悪い人とされます。日本では道を歩く時でも男の人はいばつて何ももたないで歩いてゐて、其の後から女の人がこのこと大きな風呂敷を持って歩いて来るのをよく見かけますが、私にはあまり不思議なので、後でお母さんに聞いて見たら男が日本では先だといふ事を教へてくれました。けれども、之は何といふへんな習慣でせう。

(中略)

日本人の持つてゐる一番良いことは天皇陛下に對する眞心です。天皇陛下についてお話の時は、特別の言葉を使ふし、どんな家にも天皇陛下と皇后陛下の御寫眞が飾つてあり非常に大切にします。それを見ると本當に日本の人に恥づかしくない良い人になって、天皇陛下や國旗をもっと尊ぶ心を持ちたいと思ひます。

(出典：「小羊」第三號 1936年)

〈参考資料②〉私の恩人：秋山春子先生

原田 知津子(旧姓 平井)

カナダ・トロント市で幼年時代を過ごした姉と私に日本の教育を受けさせる為、母は1934年に12才の姉と11才の私を連れて帰国しました。母は日曜日毎にPreston女史のお宅で行われたBible Class(聖書研究会)に参加しており、私も子供の頃お供をした記憶があります。そこでCartmell女史に出会った母は全く日本語の出来なかつた二人の教育について相談の結果、ご紹介頂いたのは東洋英和でした。

当時の東洋英和の特徴は、海外からの帰国子女の為の別科Special Classが設けてあつたことでした。日本の教育に遅れていた帰国子女に特訓で教育をする為の特別クラスで其の受け持ちの先生が秋山春子先生でした。先生は小柄で性格の明るい方で、何時も海老茶色の袴着用の純日本的な女史で一見英語の達人には見えませんが、其の教育法と指導力は抜群で、時には厳しく時には面白く、発奮させたり笑わせた

りして居られました。

別科の教室は師範科の狭い一部屋にあり、年齢がまちまちで学力がそれぞれ違う十数人の日本語の話せない生徒に一人一人教えなければならず、其の手際は見事なものでした。先生の方針は我々の日本教育の遅れの3年分を1年で取り戻し、年齢相応な高女科のクラスに編入させる事でした。ご苦労は大変なものだったと想像しますが、何時も前向きの持ち前の明るさで時々私達の変な日本語にケラケラお笑いになったのが印象的でした。

別科に入学を許された初めての夏休みに、姉と私の日本語の進歩が特に遅れていたの、先生は特別に二人を千葉県館山にあるご自宅に預かって下さることになり一カ月の特訓教育が始まりました。純和風の家庭での生活は総て珍しく、勉強だけでなく日常生活の指導も受けました。朝食のご飯の炊き方、お味噌汁の作り方、お掃除、日本風呂の扱い方、お布団の敷き方・収め方、そして一番苦労したのは、八畳用の蚊帳のきちんとした畳み方でした。

一年二年と経つ内に別科生は先生の良き指導の結果、それぞれに適した高女科のクラスに編入されました。2年がかりで姉は3年生に、私は2年生に入れて頂きました。5年後に帰国した妹も先生のお世話になりました。

秋山先生の遺された功績は大きく、何十人の女性が遅ればせながら日本の教育を達成する事が出来、立派な社会人になりました。特に劣等



秋山先生、ミス・リースと別科生（中庭にて）
前列左から2人目 知津子氏、一人おいて妹の溜利子氏
後列左から4人目 姉の田鶴子氏

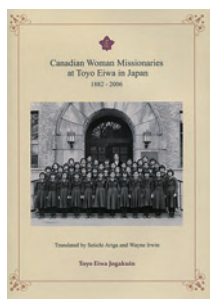
生であった私は先生から受けたご指導は後の人生に多いに役立ち、恩を忘れることはございません。

そして私達の大恩人の秋山先生のご自慢は、別科から本科へ送り出した生徒さんは「皆様優等生でした」との事でした。

(1941年高女科卒)

【史料室より】 別科出身者である原田氏の76年前と最近の文章を2点紹介させていただきました。氏は東京および冬季札幌オリンピックにてチーフコンパニオンを務められた方です。青楓寮で厳しく躰られて身につけた生活術を基に、海外経験も活かしてご自宅でハウスキーピングの教室を開講し、活躍してこられました。著作も多数あり、今年7月には「時代の証言 オリンピックを裏から支えた40年」(仮題)が出版されます。

“Canadian Missionaries at Toyo Eiwa in Japan 1882-2006” 刊行のお知らせ



『カナダ婦人宣教師物語』が世に出て2年、カナダ合同教会の有賀誠一牧師とアーウィン牧師の熱意により、英訳版が学院から刊行されました。東洋英和からの宣教師の先生方への感謝を託し、この本をカナダ合同教会をはじめとするカナダの関係者に贈らせていただきます。また、カナダに限らず日本語の読めない海外の方に学院をより深く知っていただく学院紹介用にも使われていく予定です。

購入希望の方には、1冊2,000円、郵送の場合2,200円で販売いたします。お問い合わせは史料室まで。

〈資料紹介〉 21

冊子 『海外・帰国児童生徒教育』の一考察

—第二次世界大戦下の（帰国子女学級）

東洋英和女学院「別科」の事例— 原 和子 著

富岡 暢子

この資料は、国際基督教大学学報 I-A「教育研究32（1990年3月31日発行）」から抜刷されたもので24ページの冊子である。著者の原和子氏は、東洋英和の中学部高等部にて1947年から1986年まで40年近く理科を教えた教諭である。退職後、国際基督教大学で学び、かつて勤務した英和に一時期設置されていた「別科」の事例を研究対象としてこの論文を著した。

別科の調査

1934（昭和9）年から1944（昭和19）年まで、東洋英和女学院には「別科（スペシャルクラス）」というものが設置されていた。帰国生徒やカナダ・アメリカなどの二世たちのための「受け入れ学級」であり、いわゆる帰国子女クラスといえるものである。

著者の原氏は、現在（1990年当時）の「受け入れ学級」制度を新しい視点から見直し、帰国児童・生徒教育への考察を促すために、過去におけるユニークな教育実践の事例として、この受け入れ学級「別科」の調査を試みたと述べている。この研究は、「別科」の教育について、その設置の状況、内容、実践授業について、別科担当教師秋山はる氏の談話（「史料室だより」No.14に記載）を基軸に学校及び教師の視点から調査し、他方当時の「帰国子女」である別科生にインタビュー調査をすることによって、別科・女学科での学校生活について探っている。

インタビュー対象者

インタビュー対象者は、帰国年齢13歳以上をグループⅠ、12歳以下をグループⅡとし、別科在学年度が昭和12～14年度をa、昭和14～16年度をb、昭和15～17年度をcと分類している。全員で6名の別科卒業生にそれぞれ質問しており、滞在国や、滞在年数等も考慮して分析している。

海外滞在期間が短い児童生徒は、比較的学力の回復が早く、別科時代を「活気にみち、楽し

く明るい」時であったと述べているが、海外の滞在期間が長い生徒は、「生涯これ程勉強したことはなかった」と振り返る。在学年度aの頃は比較的自由度の高い教育が行われたが、戦争が近づくにつれ戦時体制下となり学

校自体の存続も危機的状况で、それまでのように充実した教育は受けられなかったようである。

また、インタビュー対象者6名は、今では英和に「別科」の設置がされていないことを残念がり、現在も当時の「別科」の教育を高く評価しており、それぞれの異文化体験の人格形成や語学力や価値観への影響を肯定的に評価していることがうかがわれたと述べられている。

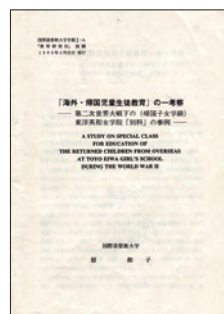
資料の意義

原氏が述べているように、別科のシステムは自由で弾力的な教育様式であることに驚かされるとともに、当時このような試みは他校でも例をみないものであったようで、1年後に早稲田国際学院ができ、恵泉にも設置されたということである。

インタビューした別科生は、調査した1980年代当時60歳台であって貴重な生の声が反映されており、帰国児童生徒の教育問題を考える上で重要な提言もなされている。

また、「別科」が設置されていた当時の東洋英和は自由な校風で、それぞれの児童生徒に対してどのような教育がふさわしいか熟慮され取り組まれていた、ということがこの研究資料には色濃く現れているといえよう。

（中高部司書教諭・史料室委員）



〈思い出の先生がた〉23 白井節夫先生

子らと共に47年

白井節夫先生は、初代の外崎長三郎先生から6代目の小学部の部長先生で、平成4年から4年間英和の児童教職員と主にある日々を過ごされた。就任1か月小学部の季刊誌ともいえる「めぐみ」に「朝の恵み」と題してペンをとられた。

「この度、東洋英和女学院小学部に勤めるようおすすをいただいた時、少なからず驚きました。“英和に勤めるようになりました”と、知人、友人に言うと、びっくりされる人が多いのをみても私が東洋英和に就職するのは、意外な出来事と言えそうです。しかも、非常勤講師、教頭と問い返されると、何だか部長で就任と言いにくくなってしまいました。罪深く、浅学菲才の身、田舎者の私には、その重責を思い、ずいぶん躊躇しました。色々な事情や理由の正と反がもつれ合って、なかなか合一しませんでした。尊敬する先輩の励ましもありました。祈りました。そういう中で、私にとって公立学校では十分出来なかった宗教教育に身を置くことが出来そうだ、という希望こそ、受諾の決心を強く促してくれるものでした。」

と述べ、小学部勤務は朝が早いと、朝毎に出会う恵みを数々記され、

「今朝も未知数をいっぱい秘めて、子らは集まってきました。まだまだ知らないだらけの私が、この子らと共に恩寵目録を増やしていきたいと願っています。」と結ばれた。

先生は温和な笑顔でみんなに接し、学校生活に気を配られ管理に意を注がれた。穏やかな学校運営は父母の信頼を得、児童も父母も英和に通う喜びを得ていた。

先生は18歳で川崎市立玉川小学校助教諭を出発点とし、その年から横浜国立大学、更に青山学院大学教育学科に学ばれた。その後も教育心理の研究をずっと続けられ、川崎市の小・中学校教諭、教頭、校長を歴任、また教育研究所の研究員、指導主事として、長くカウンセリングや教育相談、特殊教育に当たられた。視聴覚教育の充実、学校嫌いや登校拒否の研究、学力向上の条件調査や障害児教育にも取り組まれた。実に47年にわたって戦後の教育を自ら歩み、すすめ、高められたのだ。義弟の横溝達夫先生は、「同人は温厚にして博愛精神に溢れ、慈しみの

心を持って人に接し、あらゆる生きものは共に助けあっていると何事に対しても平等な気持ちを見失わなかった。いつも真摯で敬虔なものを見方考え方で子等を育ててきた。高い見識を有しながら飾り気のない無心な生き方が信頼された。豊かな創造性と温かい人間性、旺盛な研究心のもと、多くの子らや教職員、戦後の教育界を育ててきた。」と記して先生を偲んでおられる。

一方、若い日より川崎境町教会教会員として教会学校や教会役員を続けておられた。ある時期は、教団教育委員会の一員として機関誌「教師の友」にて教会学校の教案を担当、執筆もされていた。

英和の後すぐ川崎市から招かれ、総合教育センターの教育相談員として新たな活動を始められたが、しばらくして肺の異状がわかり、闘病1年にして主のもとにゆかれた。67歳の早い旅立ちに、川崎境町教会の式に列した人々は、涙を流したのだった。

先生、主の日に再び、お会いしましょう。

文 伊藤 博正 (元小学部教頭)



白井節夫先生

白井節夫（しらいせつお）先生

—略 歴—

1930年 4月29日 川崎市中原に生まれる
1948年 川崎市立玉川小学校助教諭に就任
1956年 青山学院大学卒業
一貫して川崎市公教育に携わる
1977年～ 教頭、校長を歴任
1991年 川崎市立南原小学校校長を定年退職
1992年 東洋英和女学院小学部部長就任
(～1996年)
1998年 1月13日 召天 (享年67歳)

史料室の活動より（2011年9月～2012年3月）

（☆は複数回の事項）

- 9月☆（継続）『カナダ婦人宣教師物語』英訳版
編集
- ・第2回史料室委員会
 - ☆中高部創立記念週間のパネル作成（テーマ：校外行事）に協力
 - ・来室・調査—他大学大学院生 松本千晴氏 村岡花子研究
 - ・提供—大田観光協会に片山廣子の画像
 - ・来室—1982年卒学年会幹事 資料調査
- 10月・追悼記念日礼拝 ミス・カートメルの聖書展示
- ・照会—上田市教育委員会より 宣教師たちの資料
 - ☆来室—大学Sippel教授 ミス・カートメル書簡類 調査
 - ☆生涯学習センター「第5回カナダ・日本文化交流史」聴講
 - ・来室—石井摩耶子氏（1958年卒）学年会のため画像提供
 - ・見学—ヴォーリス建築見学会参加
 - ・照会—野間口萬里子氏より、祖母 福田満喜子氏の資料 → 提供
 - ・照会—鈴木氏より、祖母小早川イク氏は卒業生か否かの確認 → 不明
 - ・展示替え—本部・大学院棟1F 史料展示コーナー「長岡輝子—神とともに—」
- 11月・ミス・カートメルの聖書展示（4日～10日）
- ・展示見学—東洋英和幼稚園 園児と保護者（4日）10分ほど解説
 - ・「史料室だより」No.77 発行
 - ・来訪—有賀誠一師 宣教師本英訳についてなど打ち合わせ（12月にも）
 - ・提供—佐々木多門関係画像 2点
 - ・来訪—卒業生2名（1959年卒）写真の人物特定に協力
 - ・資料受贈—関西学院図書館より 戦前の“Japan Christian Quarterly”コピー多数
- 12月・「Kaede MAGAZINE」No.3 英和歴史館史実チェック
- ・提供—大田区立郷土博物館へ 村岡花子と片山廣子在学関係資料
- ・来室—中学部鈴木齊部長 中高部運動会、楓祭写真調査
 - ・照会—静岡英和元校長ミス・カニンガムをお助けした卒業生 → 若林里雨と推測
 - ・依頼—ミス・カートメル書簡など数点の活字起しと翻訳 → 中高部英語科4名協力
- 1月・提供—児童歴史書へ創立期の画像 2点
- ・来室—高三補講 英文創立期史料の読み起し 受講生2名
 - ・第3回史料室委員会
- 2月・中1（5クラス）史料展示コーナー見学と鳥居坂周辺の歴史の授業
- ・史料展示コーナー「麻布未来写真館」パネル展（2/20～3/2）展示協力
 - ・来室—元中高部教諭小川京子氏 史料・写真寄贈
 - ・出張—カナダ大使館へ『カナダ婦人宣教師物語』英訳版刊行および桜プロジェクトの周知
- 3月・来訪—1944年卒業生ご長女と卒業生（1968年卒）、資料多数寄贈
- ・出張—大学史資料協議会研究会「資料収集・調査について」
 - ・“Canadian Missionaries at Toyo Eiwa in Japan 1882-2006”（『カナダ婦人宣教師物語』英訳版）刊行
 - ・来室—佐々木慶紀氏、紀人氏 佐々木多門、高橋是清関係資料提供
 - ・照会—中学部北崎勝彦教頭より、中高部のスキー教室の開始年 → 1962年

主な受贈資料

- * ミス・カートメルのロッキング・チェア
- * 書簡（長野彌元院長



ミス・カートメルのロッキング・チェア

- 自筆葉書、江良顕三郎元小学部部長自筆書簡
2通)
- * 證書 (卒業證書1939年小学科、1944年・1945年高女科、1947年保育専攻部)、(修業證書・保證書1886年)、精勤賞賞状
 - * 書類 (1951年小学部入学許可書、合格者心得、1952年小学部修学旅行のお知らせなど、1943年電話連絡網)
 - * 写真 30枚、卒業アルバム 1944年
 - * 「小羊」第1号～9号、「東洋英和ニュース」多数
 - * 「舊新約聖書」・「聖書」折革装 (どちらも学院より記念品として贈呈されたもの)
 - * 「キュックリヒ先生葬儀次第」カセットテープ、「80周年記念 梅花幼稚園」レコード、「The 25th Christmas Concert」DVD、「16th Handbell Festival」DVD
 - * “The Japan Christian Quaterly” 1926～ コピー 多数
 - * 楽譜 「Toyo Eiwa Training School」ミス・レーマン作、「ひまごとひいじいちゃん」大中寅二作、「聖歌合唱曲集」富岡正男編ほか数冊、オペラ「さるかに合戦」富岡正男台本・作曲
 - * 『でも大丈夫。神さまがいつもいっしょにいて、守ってくださるから』高橋貞二郎 (中高部教諭) 著
 - * 『クリスティーナ・ロセッティ 叙情詩とソネット選』橋川寿子 (1965年卒) 訳・注
 - * 『国際社会学の実践』三橋利一 (本学名誉教授) 著
 - * 『てんとう虫のおとむらい』近藤聡乃 (1999年卒) 作
 - * 『19世紀アメリカのポピュラー・シアター』『黎明期の脱主流演劇サイト』『アバンギャルド・シアター 1892～1992』斎藤偕子 (元短期大学講師) 著または監訳
 - * 『わが青春のハプスブルク 皇妃エリザベトとその時代』塚本哲也 (元本学学長) 著
 - * 『いい歳旅立ち』他6冊 (文庫) 阿川佐和子 (1972年卒) 著
 - * 『道その2』岡本寛子 (1945年卒) 著ほか
 - * 『日本人になった婦人宣教師 一亜武巢マーガレット』堀江節子著 桂書房

- * 「花言葉は優雅 一大森の貴婦人、片山廣子一」大田観光協会
- * 『奥 興牧師追悼記念文集』、『感謝 西村信子追悼文集』
- * 津川みち (元高女科教諭) 関係 「津川主一を偲ぶ」ほか
- * 『軽井沢ものがたり』新潮社とんぼの本、『私の軽井沢物語』朝吹登水子著 文化出版局
- * 『平和の海と戦いの海』平川祐弘著 講談社
- その他 他大学年史紀要 等多数

主な移管資料

- * 『私のアントニーア』磯貝瑤子 (元中高部教諭) 訳／『女人三代記』黒沢清子 (1944年卒) 著／『Bible Stories Retold』ミス・ハミルトン署名入り／『順禮紀行』ミス・クレイグ署名入り／壁掛け時計 中高部より
- * 高橋千恵 (元幼稚園教諭) 氏のノート数冊／「昭和廿六年以降四十三年まで幼稚園に関する書類」綴／アルバム22冊 (2000～04年度) ほか 東洋英和幼稚園より

購入資料

- * 『聖書を読んだサムライたち もうひとつの幕末維新史』守部善雅著 いのちのことは社
- * 『負けんとき ヴォーリズ満喜子の種まく日々』上・下 玉岡かおる著 新潮社

〈訂正とお詫び〉

No.77 p.7 (解説) 中

平岩愷保は関西学院院長には、選任後に日本メソジスト教会監督に急きょ就任となり、実際は就任されませんでした。

同 p.9 右の段

句集 → 歌集のまちがいでした。

〈お知らせ〉

・史料室では、学院の歴史や学生生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。ご家庭にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただけると幸いです。

お問合せ先は下記のとおりです。

東洋英和女学院史料室 (法人事務局内)

Tel 03-3583-3166 (直) Fax 03-3583-3329 (直)

E-mail : archive@toyoeiwa.ac.jp